

川崎病の治療と長期管理に関する研究
主任研究者 加藤裕久 (久留米大学小児科)

研究要旨 ガンマグロブリンの 2g/kg/日一括(単回)投与は、1g/kg/日
ないし 200-400mg/kg/日の 5 日以内分割投与より効果が
高いことが明らかになった。

分担研究者 佐地勉
東邦大学第一小児科
教授

A. 研究目的

川崎病 (KD) 急性期の グロブリン (IVGG) 不応例は冠動脈合併症の可能性が高く、そのためウリナスタチン等による IVGG 以外の治療法も追加する機会も生じている。その原因として IVGG 分割投与が考えられており、欧米で既に承認されている 1g-2g/kg/日の一括超大量療法の効果を明らかにする必要がある。

B. 研究方法

対象は KD 急性期患者典型例 50 名で、各群で年齢、性別、入院日、治療開始日、CRP、WBC を match させ、aspirin30mg/kg、IVGG 400 mg/kg x3 日、同 5 日、1g/kg/1 日、2g/kg/1 日による・治療前と治療 10 日後の白血球数、好中球数の比較、・15 日後の血小板数の比較を行った。

C. 研究結果 (表 1)

IVGG2g/kg/日の単回投与は、白血球数、好中球数の低下が有意に著しく、血小板の反応性増加率も有意に低かった。

治療法(n=10)	白血球	好中球	血小板
アスピリン 30mg/kg/日	-17%	-32%	+133%
IVGG			
400mg/kgx3 日	-26	-10	+62
400mg/kgx5 日	-21	-50	+89
1g/kg x1d	-15	-46	+60
2g/kg x1d	-41	-65	+47

D. 考察

ICH-E11 により世界的にも小児期の医薬品の適応拡大が再考の時期を迎えている。欧米では既に IVGG は「1-2g/kg の一括投与または、400 mg/kg/日の 4 日までの分割投与」の双方が承認されている (表 2)。そして、国内外の学術雑誌にも既に

1-2g/kg/1 回単回投与の有効性が多々報告され、日本川崎病研究会、近畿川崎病研究会、東京川崎病連絡会でも、有効性が定着しつつある。

E. 結論

KD 急性期の 1-2g/kg/日単回投与は、分割投与よりも有効性が高く、冠動脈障害の頻度は少なく、追加投与も回避され入院期間の短縮、後遺症の重症度や頻度にも良好な影響を与えると考えられる。以上 7 結果から、我国でも早急に 1g-2g/kg の一括 (単回) 療法への使用法の追加変更が望まれる。

表 2

日本：ベニロン、グロベニン-I、ポリグロビン N (200mg/kg/日、5 日以内)の分割投与
ヴェノグロビン-IH (400mg/kg/日、5 日以内)の分割投与
米国：Iveegam (400mg/kg/日、4 日の分割投与
又は 2g/kg/日、1 日単回)
Venoglobulin-S (2g/kg/日、1 日単回)
Gammagard S/D(400mg/kgx4 日分割投与
又は 1g/kg/日単回)

欧州：総量 1.6-2.0/kg の分割投与 2-5 日、
あるいは 2g/kg/日、1 日

単回 F. 研究発表

- 佐地 勉他：新しい治療法：川崎病のウリナスタチン療法、小児科、40:1049-1054,1999
- Matsuura H. Saji T, et al: Serum laminin reflects the severity of vasculitis in the acute phase of Kawasaki disease. J Med Soc Toho Univ. 46:121-131,1999

G. 知的所有権の取得状況

- 特許取得 なし
- 実用新案登録 なし
- その他 なし